

詠 詠 集

十一月号



花鳥諷詠[®]



令和3年11月 ■ 第404号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	木村 享史 2
	安原 葉 4

虚子研究 虚子宛書簡を読む（二十八）

明治二十五年六月二十六日虚子宛松垣精三郎書簡 封・本文共朱書	棕 則子 7
---	--------------

虚子研究 『六百五十句』 研究（22）	11
---------------------------	----

虚子を語る 深見けん二氏（前編）	16
------------------------	----

この人の作品	和田 和子 23
--------------	----------------

一頁の鑑賞	日置 正樹 24
	棕 麻里子 25

卯浪	26
----------	----

風報	28
----------	----

新刊紹介	29
------------	----

カレンダーこぼればなし②	30
--------------------	----

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

山寺を守る一生や天の川

長岡 安原 葉

顔見せぬ子より鰻の届きけり

小樽 岩崎 スイ子

笑顔美し汗なほ美しきメダリスト

金沢 篠島 安子

年毎に水桶重くなる墓参

伊賀 西澤 与志子

お裾分けそのおすそわけさくらんぼ

宗像 井上 眞知子

二句短評

一句目——山寺に生れ山寺に育ち山寺を出ず、当然のように生涯を一山僧として寺を守る作者。

明鏡止水、欲するなく貪るなく、一点を照らし続けてゆく大悟の心は、悠久の銀河と共にある。

二句目——別居されているのはご子息かご息女か、普段は音信もなく青春を謳歌されているのであろう。

土用の日に届けられた鰻、たとい顔を見せずとも、何時も心には掛けてくれているのである。愛情。

入選六十句

流れゆく万緑の色千曲川

長岡 桑原たかよし

冷房を止めて高原バスとなる

弘前 藤田 豊子

喜びを分つ同士の汗涼し

泉大津 多田羅初美

砂に寝て聴く八月の波の音

小樽 伊藤 玉枝

一枚の空千枚の青田風

神戸 岩水ひとみ

小さき影引き摺り歩く炎天下

大牟田 西坂美也子

玉音に泣きし一年生の夏

神戸 上岡あきら

行く程に狭き山路や草いきれ

金沢 村本寿美枝

風に乗る佃囃子の夕稽古

東京 清水千鶴子

敗れ去る切なき汗の背にエール

久留米 秋吉 鈴子

噴水の止みて退屈さうな水

大牟田 介弘 紀子

病窓の虹に癒されをりにけり

吹田 綿谷千世子

父と子のキャッチボールを見る日傘

福山 久保 絃子

紙の音して空蟬の転がりぬ

鳥原 高比良映子

己が足元に落ちたる汗を踏む

半田 稲葉 京閑

約束をせすに見送る夕木槿 たつの 竹内 澄子
 校門の大樟仰ぐ今朝の秋 熊本 今福 公明
 玄関の松にも蟬の殻三つ 徳島 遠藤 和良
 ふるさとは昭和の昏さ門火焚く 天理 松田 吉上
 雲の峰もう弱音など吐くまじく 姫路 上原 康子
 ひまはりを胸に五輪の表彰台 東京 中井 静子
 少年の声走り出す夏休 福岡 津田 富子
 優勝旗抱いて帰郷や雲の峰 神戸 藤澤みか子
 路地の風ここが涼しと猫と居り 伊賀 北村 みち
 かき氷一つに老いの二人かな 福岡 三坂 一生
 巡回のナースの気配明易し 福岡 梶原 敏子
 陰の白日向の白や未草 鹿児島 柳橋かすみ
 源流は雲寄るところお花畑 川口 櫻井 松翠
 虹の橋渡り行きたき夫の国 福山 杉原 芳子
 月見草月の光に濡れてをり 大牟田 石橋 武子

そのままで頂きしこと新豆腐 東京 加川 尚美
 とは言へど秋の気配も裏参道 宇佐 尾崎 陽子
 子等を待つ踊浴衣の揚げ外し 秋田 岩谷 塵外
 人となり涼しく語る一周忌 吹田 河辺さち子
 万と群れ帰心ひとつの秋燕 奈良 河村久美子
 懐しむ姑の方言盆用意 敦賀 為永香月枝
 便り読み終へて涼しさ俄なり 鹿児島 角屋敷昭子
 晩鐘に和して蛸奏でをり 松阪 谷川 弥生
 憂きことは上手に忘れ生身魂 福岡 工藤 友子
 八月の雨まつすぐに音たてて 天童 村形 嵩子
 青々と風を去なして箒草 島田 川崎 文代
 朝涼を力にテレビ体操す 鳥取 西村 史子
 バス停のぼつんと峡の秋立ちぬ 加賀 折橋紀与美
 境内を掃く水色の夏袴 鹿児島 堀之内美喜
 街路樹の続く限りの蟬時雨 富田林 中住 笛美

● 安原 葉選

特選五句

繕ひもせずに罎を守る秋の蜘蛛

埼玉新井 あい子

細き腕出さねばならぬ暑さかな

西予武知 洋子

濡れ歩くこともうべなふ梅雨の旅

福岡山口 裕子

メダリスト汗美しき笑顔かな

兵庫今地 千鶴子

優勝旗抱いて帰郷や雲の峰

神戸藤澤 みか子

二句短評

一句目——夏の季題である「蜘蛛」は元氣もよく、罎が破れてもすぐに繕ひ、いつも万全の態勢で昆虫などの獲物のかかるのを待つが、秋ともなれば罎の繕ひも十分でなく、罎を守るのが精一杯で、何となく哀れである。

二句目——平素は、他の人と比べて自分の腕の細さが氣になっていたのであろうが、暑い夏の日が来れば、その腕の細さも氣にしておれず、思い切つて腕を出さなければならぬのである。

砂日傘まん中にゐる赤ん坊	鹿兒島	徳永	春乃
青空の誘ふ悲しみ原爆忌	鳥取	椋	則子
一日の終る早さや木槿落つ	高松	和泉	金子
退院を告げるメール涼新た	高知	中村	梅子
雲白し空が青しとラムネ呑む	宇佐	磯永喜八郎	
草揺るる新涼の風あるところ	伊勢崎	村上	節子
せせらぎの音万緑の底にあり	鹿兒島	岡村	るみ子
真つ赤とは涼しき色よ鯉奔る	鹿兒島	坂本	啓子
起立する正午八月十五日	静岡	小泉	荒太
封切れば香るコーヒー涼新た	神戸	大西美紗子	
新涼や水はひかりを溢れさせ	四日市	伊藤	和子
足首の風より秋の立ちにけり	熊本	栗津	玲子
鰻焼く匂ひの列に並びけり	松山	門田	安世
雨止めば時を惜みて蟬時雨	総社	剣持	章子
盆供養夫の遺影の若きこと	福岡	徳永スキ子	

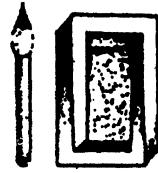
入選六十句

木洩日に藻の花光る流れかな 宮城 山家登志子
 誰彼を呼びたき真夜の女王花 姫路 英賀美千代
 雨止むを待つてゐしかに雲の峰 島根 服部 康人
 キャンパスの樹下の涼しき風の径 米原 成宮 伯水
 軒下の玉葱匂ひ来る夕べ 伊賀 前出美千子
 行く程に狭き山路や草いきれ 金沢 村本寿美枝
 古寺を凜と支へて夏木立 太宰府 白石 照子
 生れ出て夜明けの蟬の草に鳴く 高松 金沢 正恵
 六甲の端山にかかる月涼し 神戸 平田 恵
 弊衣破帽夫の青春虫干す 横浜 小野 晶子
 応援の喉を潤す麦茶かな 金沢 金子 慶一
 百礫に尽きし参道蟬時雨 君津 榎本 静江
 一山の呼気の如くに滴れり 成田 川名部さと志
 代はつてはやれぬ病や人の秋 熊本 渡邊佳代子
 浴衣着て馴れざる下駄を履く娘 久留米 矢野 愛子

売られ行く仔牛一頭夏の朝 鳥取 佐々木幹也
 遠花火夫と酌みたる日もありし 長岡 笠原佐千子
 敗れ去る切なき汗の背にエール 久留米 秋吉 鈴子
 爽やかやノーベル賞者母校より 鹿児島 平山 洋子
 居酒屋の無聊をかこつ洪団扇 福岡 深瀬 直治
 開け放つ四方の窓より蟬時雨 福岡 伊木田真理子
 噴水の人引き寄せてゐる飛沫 小郡 西田 淑子
 合飲の花雨にねぶりをりにけり 神戸 田中 由子
 水遣りは子供の日課夏休 砺波 田上真知子
 山門に一礼をして風涼し 名古屋 内藤 信子
 日傘ごと傾け合ひて遠会釈 糸島 藤原 泰子
 父と子のキャッチボールを見る日傘 福山 久保 絃子
 炎天下化粧流るるちんどん屋 福岡 杉原久美子
 殻脱ぎしばかりの蟬の光かな 阿南 田中 栄子
 門葉の囲む師の句碑樹下涼し 太宰府 柴田慧美子

これほどの月下美人の夜をひとり	朝倉 井手ちくの
昼寝して現を忘れゐるベンチ	徳島 奥村 里
秋立つも旅に出る事ままならず	小千谷 大矢あきこ
伝統を引き継ぐ若き鵜匠かな	福山 内田 千年
夕暮れて早聞こえ来る踊唄	神戸 宮下美智子
バックする新幹線や大出水	半田 加藤 清美
日盛を来し子の熱きヘルメット	金沢 石名坂房枝
千年を語る宮居の風涼し	福津 柴田佳津子
陰の白日向の白や未草	鹿児島 柳橋かすみ
帰りたくなき子を返す夜の秋	高松 白根 純子
風鈴を鳴らさぬ風もありにけり	鹿児島 大山 彊
寝つかれず微睡む窓に夏の月	南砺 有川 寛
帰省ままならぬコロナの日々続く	能美 早瀬 貞子
子等を待つ踊浴衣の揚げ外し	秋田 岩谷 塵外
今年又盆礼を欠く詫び電話	高松 星加 宏美

捕虜の日々皆忘れしと生身魂	箕面 須知香代子
晩鐘や一と日を閉ぢる花木槿	津 湯浅 重好
換気する窓を開ければ蟬の声	長岡 今井 芳子
声明と重なり合ひし蟬時雨	東京 平野 緑
青空の誘ふ悲しみ原爆忌	鳥取 棕 則子
吾子の夢広ぐる宇宙星月夜	倉敷 田中恵美子
父母もかく眺めしや盆の月	周南 河村よし子
千年の大樹を包む蟬しぐれ	十日町 富井千鶴子
喜雨止みてなほも湿りのほしき土	鳥取 五百川知子
川沿ひの生家気掛り秋出水	一宮 佐々 房子
万緑の底に一村静もれる	堺 森本 祐子
水打つて暖簾掛ければ一の客	金沢 西田さい雪
雨続く日々にも色のよきなすび	由布 立川さよ子
鰻焼く匂ひの列に並びけり	松山 門田 安世
朝顔に出勤の夫送り出す	松山 門田 智子



編集後記

一筋に神をたのみて送りけり 虚子

●第三十三回日本伝統俳句協会賞は今月末日が締め切りです。まだ一か月の猶予がありますが、募集要項をご確認の上、早めご投句いただけますようお願いいたします。

●俳句カレンダーの発送が始まりました。中には急な変更に戸惑った、文字が小さい、などのご意見もいただきましたが、郵便料の高騰および発送の難しさなどを鑑みたうえでの変更です。どうか新しい俳句カレンダーを温かく見守っていただきたく、お願いいたします。

●今月より「虚子を語る」のインタ

★ご寄附いただいた皆様★

今年度は匿名希望の方を含め55名の方より390,000円のご厚志をいただきました。厚く御礼申し上げます。

駒形 隼男 新家 正美

多田羅初美 多田羅紀子

中村 曜子 渡邊しま子

敬称略・順不同

寄附金申込書と入金を確認でき、申込書の「機関誌への掲載可」にチェックされている方のみ掲載しています。

花鳥諷詠十一月号(通巻第四〇四号)

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇,〇〇〇円

令和三年十一月一日

発行人 稲畑 汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八十九

シャンブル笹塚二丁目B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二